

「モーニングルーティン」

脚本 齋藤瑠久

登場人物

伸也（しんや） 徐々にYouTubeへ軸足を移したい俳優。
事務所の後輩・有菜と交際している。

上野（うえの） 有菜のYouTubeチャンネルの放送作家。

有菜（ありな） 結構売れてるYouTuber。 ※出演はなし。

○メモ

- ・ 部屋を中心に机
- ・ 俯瞰視点のカメラは、部屋の上部、天井付近
- ・ 手元のカメラは、机の上に

○有菜の部屋・リビング（夜）

俯瞰視点のカメラから。

伸也、ベッドの上にいる。有菜の上に、馬乗りになっている設定。

伸也、枕を使って息を止めるため、有菜の顔面を押さえつけながら、

伸也「んんんんん！！」

という、絶叫。

○同（日替わり・朝）

引き続き、俯瞰視点のカメラから。

全体的にごちゃごちゃとした、生活感のある部屋。

目覚まし時計が鳴っている。

伸也、ドアを開けて、部屋の中に入ってくる。

伸也、目覚まし時計が鳴っていることに気づいて、少し試行錯誤しながら、止める。

落ち着かない様子の伸也。

少しの間、部屋の中をうろうろとしたり、立ち止まったり。

伸也、机のそばの椅子に座る。

伸也、自分のスマホを机に置く。

ここで、手元のカメラに切り替え。（以後、適宜、切り替え）

伸也、溜息も吐けない様子で、疲れ切った顔。

伸也のスマホに、着信。バイブレーション。

伸也「（驚いた表情で、スマホの画面見つめ）……」

電話に出る、伸也。

着信は、上野から。

伸也「（愛想笑い）……えー、どうしたー。急に電話来たから。……うん。い

や、そりゃびつくりするでしょ。だって、あんまね、そんな頻繁に？ 連絡

するってわけでもないから。特に最近は」

少しの間。

伸也「（少し緊張した様子で）……あ、えー。有菜ちゃんと連絡つかないん

だ。え、なんで、なんか聞いてないの？ ……（苦笑）あ、だから、俺に、

電話したんだ。んー、いや、でも、俺知らないよ？ だって、そのー、だい

ぶ前に、コラボの動画撮影したつきり……だから。だから、その、いま電話

こっちにも来たの、驚いてるって感じー、だからー」

少しの間。

伸也「……え、ルーティン動画、撮影してたの？ え、いやそれはわかるんだ

けど。モーニングとか、ナイトルーティンとか、そういうやつでしょ。え」

少しの間。

伸也「……え、どこで撮影してたの？　ちなみに。（愛想笑い）いや、ちなみになんだけど」

伸也、立ち上がった、

伸也「（慌てた様子で）……あ、え、あ、有菜ちゃんちで。うんうんうん。（苦笑）いや、そうだよなー。ルーティン動画だもんねー。家に決まってるよねー」

伸也、うろろと歩き始めて、

伸也「え、ちなみにさ、モーニングか、ナイトか、わかる？　その撮影しようとしてたやつて。うん。いや、ちなみにだし、うん。意味わかんなくていいから」

少しの間。

伸也「……あ、へー、ナイトか。昨夜から撮影しててー、じゃあ、ね。カメラとか？　も、ずっと、ね。部屋にあるってことだもんね。ナイトルーティンだもんね」

伸也、電話しながら、部屋に設置されたカメラを探すような素振り。

伸也「（早く電話切りたいから、急に雑な対応で）うんうん。わかった、わかった。有菜ちゃんからも連絡来たら連絡するー。うん、お疲れー」

電話を切った瞬間、伸也、自分のスマホ、机に投げて置く。

急いで、設置されたであろうカメラを探し始める。

見つけたカメラは、机の上に投げ捨て。

すぐに見つかるカメラと、意外と見つからないカメラ、どちらもある。

伸也、3つくらいカメラ見つけ出したところで、インターフォンが鳴る。

机の下を覗いて、カメラを探そうとしていた、伸也、驚いて。

伸也、足音を立てないよう、インターフォンのモニター確認。

そして、玄関付近まで行って、ドアの鍵がかけられているか、確認。

リビングの方まで、伸也、戻ってくる。

その途中で、ドアが開く。

伸也「ええ」

慌てて、うろろと周りを見回して隠れるとこがないか確認した上で、取りあえず、机の下にもぐろうと動き出す伸也。

しかし、その途中で、上野、部屋に入ってくる。

伸也「……」

上野「……」

伸也、中腰の状態から徐々に、姿勢を正しながら、

伸也「……えー、お疲れ、さまー」

上野「(状況飲み込めず) ……え、え。……伸也さん、何してるんすか」

伸也「(愛想笑い) なにしてるって、ただ、1人の人間が、1人でに、部屋にいるだけ、だけど」

上野「いや、ここ、有菜の部屋なんですけど」

伸也「(わざとらしく部屋を見回して) ……あ、そうなんだ」

上野「いや、そうなんだじゃなくて」

伸也「うん。そうだよね」

上野「(いまだ状況飲み込めず) え、え。いや、え。いや、僕は、その、有菜、有菜さんと連絡つかないから。そのデータだけでも、送ってもらえば。いやだけど、その今度のコラボ動画の人選どうするのか問題とか、話さないといけない。ていうか、今日、この時間に話そう的な話を、本人としてー」

伸也「あー、コラボねー。よく精力的にやってるもんねー」

伸也、取りあえず、座る。

上野、取りあえず座り始めてた伸也に驚きつつも、

上野「だから、僕はここに、来たんですけど。なんで、その、そこに？ 伸也さんがいるのになって、ずっと、あの、はい、思ってた」

伸也「ね、さっきね、電話したのにね」

上野「そこじゃなくて、ていうか、電話では何も知らないって言ってたじゃないですか。有菜……さんとは、全然連絡取ってないって。最初、コラボした？ 時から、会ってないって」

伸也「(うつむいて) ……」

少しの間。

上野、伸也のことを怖がって、距離を取りながら、机に置かれたカメラを取ろうと、

上野「だから、そのー、カメラだけ回収——」

言い終わる前に、伸也立って、カメラを取ろうとした上野の腕を掴む。慌てる、上野。

上野「え、え、いや、ただ、カメラ(引っ張って手を抜こうとする)」

伸也「(上野の腕、掴んだまま) ……」

上野「え、え、なんか、声出してくださいよ。無言が、無言が、一番怖——」
伸也「あのさ」

上野、腕引き抜こうとするのをやめて

上野「(怖がりながら) ……はい」

伸也「(机に置かれたカメラ見て) 回収したの全部、電源切れてるんだけど」

上野「……はい」

伸也「こういうカメラってさ」

上野「……はい」

伸也「……電源切れたら、その前の？ 撮影してたデータって、消えたりとかしないの？ そのー（笑って）よくさ、あるじゃん。ドラマとかで。パソコンの電源急に落ちたから、その前のデータ全部消えちゃっ（※）たーみたいな」

上野「（※から）ないです」

伸也「え？」

上野「それはないです。データ残ってるんで。ちゃんと。電源切れる前に、ちゃんとバックアップされるんで、それはないです」

伸也「……そうだよな。（落胆から、少し安心に変わって）いや、そうだよな。そっか。……じゃあ（笑って）駄目かー。もう」

伸也、上野の腕から手を離す。

上野、掴まれていた部分さすりながら、カメラを確認する。

伸也、椅子に座る。ベッドの方を見つめたりして、泣きそうになる。

伸也、上野のほうへ顔を合わせないままで、

伸也「……あのさ、1つだけ、気になってること、あつて」

上野「（カメラを確認しながら）はい」

伸也「俺さ、鍵ちゃんと閉めたんだよね」

上野「……」

伸也「なのにさ、上野くん、鍵開けて、ここに入ってきたじゃん」

上野「……はい」

伸也「それ、なんでかなーってだけ、最後にさ、聞かせてくれない？」

上野「（平然とした様子で）あ、付き合ってるんですよね」

伸也「……え？」

上野「有菜さん。有菜と、付き合ってるんですよねー」

伸也「……え、付き合ってる？」

上野「（軽い感じで）はい。だから、どんな事情があっても、有菜、こっちら電話かけたら、絶対連絡返してくると思うんですよねー。だから、今のこの、連絡つかない状況？ 彼氏的には、ありえない状況で」

カメラを確認していた上野、はっと顔を上げて、

上野「（笑いながら）あ。カメラ、バッテリー切れたんじゃないかって、そもそも電源入れてませんでした。（ニヤニヤしながら、カメラいじって）有菜、そういうところあるんすよねー。大事なこと、ドジ？ みたいなところあるからー。まあ、可愛いからいいけどー」

伸也「(交際の事実からずっと、状況飲み込めず)……」

上野、伸也のほう振り返って、カメラを見せながら、

上野「(嬉しそうに)ほら、伸也さん。データ残ってないの。撮影できてないの。ちゃんとセッティングだけ自分でしておいてねー。可愛い」

伸也「……」

上野、伸也の様子に気づいて、

上野「全部知ってますよー」

しばらくの間。

伸也「……え？」

上野「(笑って)だって、昨日有菜と会おうって言ったのに断られたし、ていうかそもそも、この部屋ちよっと匂い残ってるし。生臭い匂いって、いうのかなー」

伸也「(殺したことがバレるかもの表情)……」

上野「伸也さんも……、有菜と付き合ってたんですね」

伸也「あ、そっち？ あ、いや、うんうん」

上野「(元氣そうに)あ、でも、大丈夫です！ 僕、そういうの理解あるんで」

伸也「(軽く引きながら)あー、まじでー？」

上野「はい！ だって、有菜めっちゃ可愛いからー。まあ、そうだよなーって感じもするしー。僕みたいな人間が付き合えてる？ この状況自体、奇跡！ みたいな感じなんでー」

伸也「……そう、よねー。うんー」

上野、伸也近くの椅子に座って、椅子を引きながら距離を詰める。

上野「だからー、伸也さんと共有できてー、嬉しいなって思ってます！」

伸也「(引きながら)……えー、あー、こちらこそー(苦笑)」

上野「だって、ウザくないですか？」

伸也「……ん？ なにがー？」

上野「よくあるじゃないですか。ドラマでも現実でも、彼女の浮気、バレてー、殺しちゃうみたいな。独占欲高めの彼氏が」

伸也「(それは自分のこと)(が、ゆえにぎこちなく)……いるーよねー」

上野「まじあり得なくないですか？ 天使と付き合えてる時点で、満足しろよって話で」

伸也「……でもさ」

上野「(嬉しそうに)お、反論ですか？」

伸也「上野くんはさ、いつから有菜と付き合ってた？」

上野「えーなんか、恥ずかしいなー」

伸也「(真剣に) 答えて」

上野「(驚いて) ……半年前? くらいからですかね」

伸也「俺はさ、有菜がまだ、YouTuberとして? 有名になる前から、付き合ってたから」

上野「時間なんて関係なくないですか?」

伸也「関係ないかもしれないけど、俺は、本気だったから! 本気で、本気で、ずっと一緒にいたいって思ってたから」

上野「(苦笑) ……伸也さんって、真面目っすね」

伸也「(怒りを抑えて) ……」

上野、立ち上がって、伸也の肩を叩いて、

上野「(笑いながら) そんなことで、殺さないでくださいよー」

伸也「……」

上野「不謹慎だな、とか、言ってくださいよー」

うつむく、伸也。

上野、スマホを見る。

上野「ていうか、本気で、連絡来ないですね。伸也さん、電話しました? 有菜に」

伸也「……出ないよ」

上野「でも、伸也さん、有菜の仕事用の連絡先しか、知らないですよね?」

伸也「(驚いて、顔を上げる) ……」

上野「だから僕、プライベートの方に、もう1回、電話かけてみますね」

電話をかける、上野。

2人がいる部屋から、バイブレーションが聞こえ、顔を見合わせる。

上野、スマホ、耳から離して、

上野「(驚いて) ……え、どっから聞こえてます?」

伸也も遅れて、部屋を見回す。

上野、歩きながら、音の在処を探す。

上野「……あれ、上かな?」

上野、顔を上げて、有菜のスマホを探す。

俯瞰視点のカメラと、上野の視線が、合う。

伸也も立ち上がって、少し遅れて、視線を合わせる。

上野「……あった」

ここで、カメラ切り替え。

上野が持っているスマホから、俯瞰視点のカメラを撮影する。

上野「……これ、データ残ってそうっすね」

(終わり)

